Junko Higasa

『猫』の世界に重ねて

『吾輩は猫である』の中には、映像的に自分の経験を想起するシーンがある。私がこの小説を好む理由は、文章表現の面白さやあらゆる知識の宝庫であるからだけではなく、そんな理由もあるかもしれない。

まず苦沙弥先生が「大町桂月」の言に応酬するところで、苦沙弥先生の夕飯の膳の横に吾輩が座っているシーン。私の母の長姉は色白美人で、千葉の網元の男ばかり 6 人兄弟の一人に見初められて嫁いだ。東京できれいな着物を着てコンサートに行ったりしていた生活の大転換。その伯父が「都会の子は海を見たことがないだろうから」と夏休みに呼んでくれた。当時の漁師の経済は、大漁ならサラリーマンの何十倍も稼ぎ、雨天や不漁なら収入はないという不安定なものであった。でも経済状況に関わらず親戚中の子供を毎年呼んでくれた。不漁の時はイカだけでご飯を食べる日が何日か続く。ただ裏庭で育てているトウモロコシやサザエの壺焼きだけはふんだんに食べられた。そんな漁師の家のこと、皆朝が早い。他の子たちが帰ってしまって、一人残った私が遅くにノコノコ起き出して一人で膳に向った横に、ちょうど小説のシーンのように黒猫がおとなしく控えていた。味噌汁の中には私の大好きな卵が入っていた。私がそれを楽しみに箸に掴んだ時、丸い卵の黄身が猫の前に転がった。「あっ！」と思うと同時にすでに卵は猫の腹に収まっていた。満足そうに舌なめずりする猫を捕まえて、私は卵を取り戻せないことを嘆いた。翌年行くとその猫はいなかった。猟師が誤射したと亡骸を運んできたそうだ。子供心に猫が卵を食べられてよかったと思った。

次に、苦沙弥先生が落雲館の生徒の侵入に「臨時の気違い」になって、吾輩の横腹を蹴飛ばして庭下駄をつっかけて駆け出していくシーン。私は油絵を習っていた。発表の場として展覧会がある。展覧会には期日がある。勤めの傍ら描いていて時々徹夜をした。ある朝、家の前の道路で選挙演説が始まった。時計を見ると 7 時 10 分前である。選挙活動は 7 時からと決められている。私の場合「10 分睡眠を損した」という個人的理由であるが、瞬時に頭に血が上り、ガバッと起き上がり着替えるが早いか、2 階の階段をダダダッと駆け下りサンダルをつっかけて抗議しに行った。東京都で埼玉県の演説をしていることも抗議の要因であった。「臨時の気違い」は胃酸過多の時に顕著だった。胃酸過多をコントロールする方法を見出してから、あまり癇癪を起さなくなったが、辻褄の合わない理論で自分を主張する人、何回説明しても同じ過ちを繰り返す人には、胃の具合に関係なくいまだに時々「臨時の気違い」になって対抗する。

それから苦沙弥先生の 3 人の娘たちが食事をするシーン。味噌汁掛けごはん。私は菓子ばかり食べていて、菓子パンは食べるがご飯はあまり食べない子だった。小学校入学にあたって、お昼まで何も食べられなくなるから「腹持ちのよいご飯」を食べていきなさいと言われても、おいそれと入るはずがない。ご飯を眼前に「これなら何とか食べられるかもしれない」と考えてエイヤッとご飯に味噌汁をかけた。それを見て母が「まるで猫まんまだ」と愕然とした。「猫まんまって何？」と聞くと、母が実家で飼っていた白猫の食事は味噌汁掛けご飯に鰹節をかけたものだったそうである。吾輩は猫であったか。いやあ、道理で習性が猫に近いと思った。　　(2012. 3. 25)